



のままで終わらないことが多いのです。目蓮尊者の母親が、わが子を思うあまりに罪を犯して、餓鬼道に墜ちられたという、お盆の由来である有名な話は、それを如実に示しています。人間の真実心には限界があるのです。

○仏さまの真実心は、完全仏さまの真実心は、完全他者の立場に立つて思うことの出来る心と同時に、その思いを完全に成し遂げるための出来る智慧があります。

「相手の立場に立つて思う心」を「慈悲」といい、「その思いを完全に成し遂げる力」を「智慧」といいます。

仏さまの真実心には、この「慈悲」と「智慧」が完全に兼ね備わっているのです。

○金色に輝く私達西本願寺系の大学の京都女子大学を卒業したある女性の話です。

この女性は卒業後3年ほどして、良い伴侶が



見つかり、結婚をし、そして待望のお子さまができました。

ところがその子供には心に障害があり、まだ障害者に対する偏見が残されていた時代に大変な苦勞をされるのです。

最初は夫婦で頑張つて育てていましたが、次第に夫婦仲もこじれてきました。ほとほとくたびれて果てて、ある日絶望に打ちひしがれて、とうとうその子を道連れに死のうと思ひ詰められたのです。

そこで身辺整理のようないことをしていたら、たまたま大学時代のノートが目に付きまして。

10年ほど前、徳永道雄という先生に学んだ仏教学のノートであり、そこには「悉皆金色の願」という言葉がありました。

自分で書いておきながらもうとつくに忘れていたのですが、そこには「一切のものを皆ことごとく金色に輝かせる」と書いてあり、先



生から聞いたその言葉を思い出すのです。

「悉皆金色の願」とは、阿弥陀仏さまの四十八の願いの一つで、「たとえ私が仏と成つても、國中の人々が、悉く金色に輝かなければ、私はさとりを得ない」との願です。

つまり、「この世の全てのものは何一つ無い」ということです。

この女性も、どん底の中で、この呼び声に再会されたのです。

道連れに死のうと思つていたこの子が「金色に輝いている」。

そして、その子を抱えて絶望のどん底に打ちひしがれている、この自分もまた「金色に輝いている」。

すぐさま必死の思いで徳永先生に電話を掛けられたとのことです。

「先生、本当でしょうか？」

「この子でも光輝いてるんでしょ？」

「我が子に手を掛けようかしら？」

でも、光輝



いてくれよと願っておいて下さる方が、本当にいいでなんでしょうか？」と。

学生時代には、なにげなしにしか聞かなくてこなかったその言葉が、いのちのぎりぎりの問題に直面して、真実の声として聞こえてきたのです。

○智慧と慈悲に見守られる私達は、今、そんな願いに出会っているのです。

無限の智慧と慈悲に見守られ、はぐくまれているのです。

私達が思いはからうよりもはるか前に、阿弥陀様がこの願いを完成させ、間違ひなく私達に、その働きを届けていて下さるのです。

そのあかしが、私の口から「南無阿弥陀仏」とこぼれでるお念仏なのです。

最高に不思議なもの

いのち

それが今ここに

憶わぬさきから

憶われない者も

おがまれない者も

おがまれないときも

おがまれないときも

東井義雄先生

